

著作権保護コンテンツ

東京都文京区後楽1-3-61
蔵書数：約5万冊



野球殿堂博物館 図書室

図書室前にある「やきゅうの本だな」では、
絵本や本、雑誌を手にとって読むことができます

野球殿堂博物館のなかにある図書室です。日本に野球が伝わったのは約150年前でした。その150年を圖書・雑誌・新聞などを通して、たどることができる図書室です。図書、雑誌、新聞など約5万冊の資料を所蔵しています。



埼玉県さいたま市大宮区大成町3-47
蔵書数：和書約1,170冊 洋書約170冊

鉄道博物館 キッズライブラリー

親子でふれあいながら楽しく学べる鉄道の世界



鉄道博物館は、JR東日本創立20周年記念事業のメインプロジェクトとして、2007（平成19）年10月14日、さいたま市大宮に開館しました。18（同30）年7月には新たに南館をオープンし、多彩な切り口で人と鉄道の豊かな物語を展開する博物館へと生まれ変わりました。

北館にあるキッズライブラリーは、お子さまが鉄道の世界を楽しく学べる素敵な場所です。お子さまを対象とした鉄道に関する絵本や外国の鉄道図書をご覧いただけます。

実際に使用されていた鉄道車両の座席に座り、まるで旅行中の車内で本を読んでいるような体験ができるのが魅力です。また、靴を脱いで親子でゆつくり絵本を楽しめる広いフロリングスペースもあります。お子さまが楽しく鉄道を学び、そして親子がふれあう場所としてご利用いただけます。



美術館

東京都江東区三好4-1-1 東京都現代美術館B1F
蔵書数：約28万冊(内、こどもとしょじつ約1,800冊)



東京都現代美術館 美術図書室 こどもとしょじつ

子ども向けの現代美術に関する図書や
現代美術家がたずさわった本



美術図書室に併設している、子ども向けの図書室で、ペーパーも入れます。

現代美術家がたずさわった本や、展覧会に関連した本などをご覧いただけます。一般閲覧室とはガラスで隔てられているので、声を出して本を読んでも大丈夫。テーマを設けて小展示もしており、外国語の図書の収集にも力を入れています。本から現代美術に親しむきっかけづくりにご利用ください。

みなさんの
おすすめの1冊を
教えてください

これから読みかき始める方のために、
はじめて読むのにおすすめの1冊をみなさんに
伺いました。コメントも参考にしてください。

※誌面の都合上、アンケートの回答すべてを掲載できませんでしたが、ご了承ください。

赤ちゃん向け



『おやすみもみもみ』

作／せんぶくさり
絵／かわしななえ
1,100円 (PHP 研究所)

お布団にごろんと寝転んだら、おやすみもみもみのはじまり～。「どーこだどこだ おいしいのどこだ？」とやさしく語りかけながら、順番にさわって、ぶるるる～ん。擬音語とともに親子のスキンシップが楽しめます。

親子のコミュニケーションをとるのに大活躍の絵本です！
赤ちゃんの体の一部を食べものにたとえてマッサージしたりふれあったり。オチもよくて盛り上がりやすいよ～。

(滋賀県／澤村 忍さん)

ほったや足の裏をくすぐるといった、赤ちゃんの大好きなふれあいが繰り返し行われ、赤ちゃんや保護者も笑顔になります。はじめておはなし会に参加する親子もリラックスできる絵本なので、赤ちゃん向けのおはなし会の最初の1冊におすすめです。

(高知県／奥田さん)

「くっついた!」の繰り返し楽しく、お子さんも親御さんにもっこり笑顔になる1冊です。難しく考えることなく読めるので、はじめての方におすすめです。

(神奈川県／あーちゃんさん)
弾むような言葉の繰り返しで、親子のふれあいにピッタリです。(愛知県／本野 菜さん)



『そらまめくんの
こしょ こしょ こしょ』

作／なかやみわ
935円 (小学館)

グリンピースくんがやってきて、そらまめくん「こしょこしょあそびつてしってる？」と聞きました。知らないというそらまめくんを、「こういうあそび!」と、グリンピースくんがくすぐります。



『くっついた』

作／三浦太郎
880円 (こぐま社)

見開きに描かれた金魚さんが、ページをめくると、くっついた! アヒル、ゾウ、サルも次々にくっつきます。最後は赤ちゃんを真ん中に、お母さんとお父さんが「くっついた」。

絵を見ているだけでも、誰もが幸せな気持ちになる1冊。アクセントは読み手の自由です。言葉をつかえない乳児さんでも指さして何かを伝えようとしてくれます。

(東京都／児玉ひろ美さん)

間違いない1冊。すでによく知っている本であっても、子どもたちは繰り返し楽しめます。絵本にチカラがあるので初心者におすすめ。ただし盛り上がったあと、次の本につなげるときの工夫が必要。(福岡県／尾場瀬淳美さん)
言葉と絵のおもしろさに赤ちゃんは釘づけです。(神奈川県／鈴木きみ代さん)
みんなで「だ、る、ま、さ、ん、が」と読みます!! (福岡県／とんからりんさん)



『ぼんちんぱん』

作／柿木原政広
990円 (福音館書店)

「ぱんぱん しょくぱん ほんちんぱん」と、おいしいそうなパンが次のページでは楽しい顔に様変わり。あんぱん、ロールパンとおなじみのパンでリズムよく「ぼんちんぱん」と繰り返されます。



「だるまさん」シリーズ

『だるまさんが』
『だるまさんの』
『だるまさんと』

作／かがくいひろし 各935円 (プロンズ新社)
赤くてまあいなるだるまさん。「だるまさんが」の言葉とともに、体が左右にゆらゆら揺れ、ページをめくると転んだり、縮んだり、のびたり。独特のリズムと繰り返し小さな子どもたちにも大人気の名作絵本。

著作権保護コンテンツ

未就学児から

読み継がれてきた絵本には力があります。はじめて読みかきに挑戦する方も聞き手と一緒に楽しむことができ、読みかきかせの醍醐味を味わえると思います。

(神奈川県／あーちゃんさん)

リズムカルでかつ、見開きで1場面が完結し、絵を楽しむことができます。

(千葉県／岩崎ふみ子さん)



『おおきなかぶ』

再話／A. トルストイ
訳／内田莉紗子
画／佐藤忠良
1,320円 (福音館書店)

とても大きく育ったカブをおじいさんが抜こうとしますが、びくともしません。そこで、おじいさんはおばあさんを、おばあさんは孫を、孫はイヌを、イヌはネコを呼んでできますが、それでもやっぱり抜けません。

「誰かな？」と投げかけながら、一緒に楽しめる場所がいいです。場の空気をあたためるのにもってこい。

(京都府／たむさん)



『おめんです』シリーズ全4巻

作／いしかわこうじ
各1,210円 (偕成社)

鬼のお面、かぶっているのは誰かな？ 仕掛けをめくると、角があるウシさんでした。では、白いおたふくのお面、真っ赤なダルマのお面、緑色のカツパのお面は、誰がかぶっているでしょう。

誰もが知っているおはなしなので、はじめての方でも気負わずに聞き手と一緒に楽しめる作品だと思います。

(千葉県／anさん)

みんなの人気者のぐりとぐらに会えるのはいつでもうれしいことです。
(長野県／畑山裕子さん)

『ぐりとぐら』

作／なかかわりえこ 絵／おおむらゆりこ 1,100円 (福音館書店)
野ネズミのぐりとぐらはお料理することと食べることが大好き。大きな卵を森で見つけた2匹は、カステラをつくることにしました。そこで、フライパンや材料を持ってきて、お料理のはじまりです。



一緒にお弁当箱に詰めていく楽しさと、最後のページのお弁当包みの結びをほどく小さい手の愛おしさがあります。

(神奈川県／t.sugiuraさん)



『おべんとう』

作／小西英子
990円 (福音館書店)

お弁当をつくりましょう。お弁当箱を用意したら、まずは炊きたてのほかほかごはん。それからミートボールに卵焼き、ぷりぷりのタコさんウィンナーと次々詰めていきます。

「くるまはどうするか？」と語りかけたあとは、聞き手の反応を待って(間を取って)から次を読むようにしています。

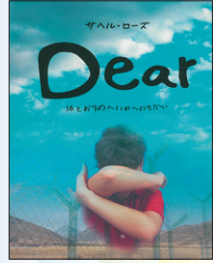
(福井県／伊藤恵子さん)



『しんごうきピコリ』

作・絵／サ・キャビンカンパニー
1,430円 (あかね書房)

青は進め。黄色は止まれ。赤は絶対止まれ。次に信号機が変わると、ピンクに! 車はどうなる? 次に黄緑に変わると、車はジャンプ。オレンジ、紫、すべての信号がつくと……。予想外の展開にワクワク!



『Dear 16とおりのへいわへのちかい』
著／サヘル・ローズ
1,870円(イマジネーション・プラス)
シリア、イラク、クルド、バングラデシュを訪れた作者が、現地の子どもたちからメッセージを受け取りました。戦争で家を追われた子、親を失った子など、それぞれの思いを受け止めた作者は、戦争を知らずにすむ世界を望みます。



『戦争は、』
文／ジョゼ・ジョルジェ・レトリア
絵／アンドレ・レトリア 訳／木下真穂
2,200円(岩波書店)
戦争は日常をずたずたにします。ありとあらゆる恐怖が集まって、残忍な姿に化け、人々を悲しませて、押しつぶし、だまらせます。淡々と描かれる戦争が、より一層不気味に静かに迫ってくる様子を伝えます。

いまでも戦争は終わらない



『ひとのなみだ』
文／内田麟太郎 絵／nakaban
1,760円(童心社)
大統領が叫び、戦争が始まりました。ロボットを買えない小さな国、ドローンを買えない遠くの国をロボットの兵隊が攻めます。戦地に行かない人たちは、そこで何が起きているのか知らないふりをしているのです。



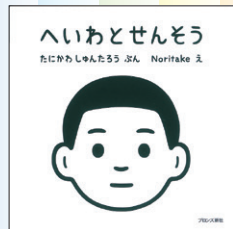
『このほしのこども』
作／吉田尚令 1,760円(あかね書房)
世界のあちこちでひどいことが起きて、つらい思いをしている子どもたちがいます。でも遠い国の子どもたちも、私たちも、同じこの星の子どもたち。みんなで友だちになって、楽しい世界になるよう想像しよう。



『せかいのひとびと』
絵・文／ピーター・スピアー
訳／松川真弓
1,650円(評論社)
地球上にはたくさんの方がいますが、生まれたときからみんな違って、見た目も暮らし方も違うし、親切な人とそうでない人もいます。いろいろ違って、だからこそ、誰もが素敵なのです。



『この世界いっぱい』
文／リズ・ガートン・スキャンロン 絵／マラー・フレイジー
訳／長田 弘 品切れ中(ブロンズ新社)
みんなで畑を耕したり、大きな木で子どもたちが遊んだり。そんななにげない日常が描かれています。その日常こそが、生きる喜びで、それがこの世界いっぱいにあふれますように。



『へいわとせんそう』
文／たにかわしゅんたろう
絵／Noritake
1,320円(ブロンズ新社)
平和のときの様子と戦争のときの様子が対比され見開きに描かれています。平和な日常から戦争になると、手に持つものも鉛筆から銃へ変わります。でも本当にすべてが変わるのでしょうか。



『へいわってどんなこと?』
作／浜田桂子
1,650円(童心社)
平和とは、戦争をしないこと。それはもちろんですが、おながやすいなら誰でもごはんが食べられること、友だちと一緒に勉強できること、それからきみとぼくが生まれてよかったということも、平和なのです。



『空はみんなのもの』
文／ジャンニ・ロダリ
訳／関口英子
絵／荒井良二
1,870円(ほるぷ出版)
どこまでも続く広い空って、誰のものなのでしょう。ぼくが見ればぼくの空、みんなにそれぞれの空があって、どこまでも続いているのに、どうして大地は境界ばかりなのでしょう。



『くらげのバボちゃん』
文／かこさとし
絵／中島加名
1,870円(講談社)
戦争が終わったあとの小さな島で、男の子が船を待っていました。町に働きに出るその子を見送るお母さんのひと言を、海の中で聞いたクラゲのバボちゃんは、その思いを伝えようと波に揺られて旅に出ます。戦争を描こうとした作者の思いを、孫の中島さんが絵にしました。



『さくらがさいた』
作／あまきみこ 絵／鎌田暢子
1,650円(文研出版)
クミと散歩していたおばあちゃんは、黒いイヌを見て、昔のことを思い出して話してくれました。昔、大連に住んでいたこと、戦争が終わって引き揚げてきたこと、そのとき飼っていた黒いイヌと別れなくてはならなかったことを。

『やくそく ぼくらはぜったい戦争しない』
作／那須正幹 絵／武田美穂
1,980円(ポプラ社)
朝、「にいやん、いつてらっしゃい」とぼくを見送るおばあちゃんは、夕方帰るときも玄関で出迎えてくれます。おばあちゃんは、原爆で亡くなってしまったお兄ちゃんをずっと待っているのです。



『野ばら』
文／小川未明 絵／あべ弘士
1,540円(金の星社)
戦争をしている隣り合う国。国境を守っているのは、片方の国は年老いた兵士で、もう一方の国は若い兵士でした。ふたりは次第に言葉を交わすようになりますが、若い兵士は遠く離れた戦地へ行くことになってしまいます。



7月中旬発売予定
『朗読詩 ひろしまの子』
詩／四國五郎 絵／長谷川義史
1,760円(BL出版)
1980年8月6日に広島で行われた原水爆禁止世界大会のために四國五郎さんがつくった詩を、長谷川義史さんが絵本にしました。子どもたちのために平和を願う強い思いが伝わってきます。

太平洋戦争 終戦から 80年を経て

著作権保護コンテンツ

今号の注目

『チリとチリリ さくらのおはなし』

作／どいかや
1,430円(アリス館)

チリとチリリがお花見に出かけました。キッチンカーでサクラのスイーツを食べたあと、木の中でおしゃれ体験、木の上からのお花見と楽しい時間。最後は森のみんなとサクラシャワーでサクラの見おさめです。



作者のどいかやさんより

野の花が咲き始め、サクラが散り、本格的な春がやってくるまでの、わずかに季節が変わっていくさまを、チリとチリリと一緒に感じてもらえたらうれしいです。『チリとチリリ さくらのおはなし』ぜひ読んでくださいね!

編集の西田菊恵さんより

2003年に始まった「チリとチリリ」シリーズの9作目。著者が「シリーズの表紙の色にピンクがあればいいな」と思ったことから生まれました。全編ピンク色に彩られた、新しい季節の喜びに満ちた絵本です。

『いろいろたべもの』

作・絵／内田有美
1,430円(偕成社)

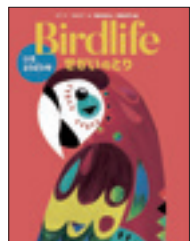
白い食べもの、なーんだ? 大福、卵、マシュマコ、食パンなどなど。オレンジ、赤、黄色に緑と、色ごとに描かれたシルエットをヒントに、くだものや野菜などいろいろな食べものを当てていきます。



『いろとりどりの せかいのとおり』

作／ビート・クロマー
訳／蒲池由佳
監修／高部圭司
2,530円(化学同人)

ダチョウやコウテイペンギン、フラミンゴなど、世界各地にすむ18種類の鳥たちが、ポップなイラストで登場です。卵の色や暮らし方の特徴などの解説は、わかりやすく、ひらがなとカタカナだけで書かれています。



『しずかなこえ』

文／トム・パーシヴァル
絵／リチャード・ジョーンズ
訳／よしいかずみ
2,530円(化学同人)

小鳥が暮らす森は、いろいろな声で騒がしく、小鳥の声は誰にも届きません。ある日、小鳥は、今までにない森の一大事に気づきました。森のみんなに伝えるため、大きくはないけれど、力強い声を出したのです。



『でんしゃくん、まちへ』

作／石倉ヒロユキ
1,595円(岩崎書店)

野原の駅には、お客さんはめったに来ません。「もっとお客さんがたくさんいる町へ行ってみたいな!」と、思いきって町へ走りだした電車くん。町では新型電車たちが、たくさんのお客さんを乗せてスイスイ走っていました。



『ともちゃんとうし』

作／市川朔久子
絵／おくやまゆか
1,540円(岩崎書店)

学校に行きたくないともちゃんが泣きながら歩いていると、小道のまん中に大きなウシが座りこんでいました。ウシはともちゃんを背中にのせて、のっしりのっしりと、ものすごくゆっくり歩きだしました。



『なにでもないもん』

作／少年アヤ
絵／阿部海太
1,870円(岩崎書店)

私が何でもなかったころ、どんなものにもなれました。毎日好きなことを好きなだけすることができ、どこにだって行けました。「何でもない」自分を見失った私は、もう一度「何でもない私」に出会います。



『とってもすばらしい場所』

文／マット・デ・ラ・ベニヤ
絵／パオラ・エスコバル
訳／さくまゆみこ
1,980円(岩波書店)

ルーカスは、家族の誰からも関心を寄せられていないように感じていました。夜、不思議な光に誘われてついたところは、すばらしい人たちが暮らす、シミひとつない場所。ルーカスは歓迎され、そのひとりになったように思いました。



『どうぶつさんと あーそーぼ!』

あなあきえほん

作／おおのたろう
1,650円(大泉書店)

赤ちゃんが動物さんを探しています。見つけたら、「あーそーぼ!」と声をかけて変身です。ゾウさん、パンダさん、キリンさんなどなど、たくさん動物たちが遊んでくれました。最後はライオンさんとひと休みです。



『巨石運搬! 海をこえて 大阪城へ』

作／鎌田 歩
1,760円(アリス館)

お城の立派な石垣を見たとき、どこから、どうやって運んできたのか不思議に思ったことはありませんか。大阪城の石垣は、瀬戸内海に浮かぶ島から海を越えて運ばれました。その長い旅の様子を、観音開きの仕掛けも使って伝えます。



『そつえんするってことは』

作／中川ひろたか
絵／あおきひろえ
1,650円(アリス館)

きみは生まれてから、1歳、2歳と大きくなって、できることがどんどん増えました。そして、広い場所に移っていきます。それが、卒園。卒園するってことは、大きくなったお祝いです。もっともっと大きくなあれ!



『だいぶつさま かぜをひく』

文／荻田澄子
絵／中川 学
1,650円(アリス館)

なむなむ病院は仏さま専門の病院です。そこへ大仏さまが救急でやってきました。心配した仏さまたちはそれぞれの特技を生かして、一生懸命看病します。そのおかげで大仏さまはすっかり元気になりました。



『ひろい海にぼくたちは生きている』

作／長倉洋海
1,980円(アリス館)

陸地に家を持たず、広い海の上で生活している人々がいます。それぞれの地域の気候に合った生活様式です。のびのびと自由に、海とともに生きている日常の様子が、たくさんの写真を通して伝わってきます。



『つめたいこおり どんなかたち?』

写真／細島雅代
構成・文／伊地知英信
1,540円(岩崎書店)

家の中にある、冷凍庫の氷は知っていますね。寒い季節、自然の中にはいろいろな氷があります。霜柱、霜、氷柱、いろいろな氷の姿が写真で紹介されます。厚くはった池の水から、おいしい氷もあらわれました。



もう読んだ? 新刊 100!!

2024年12月～25年2月に発売された新刊絵本から読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちと素敵な時間を過ごしてください。

※出版社五十音順 ※㊦は右開きの本。㊧は縦開きの本。
㊦マークは乳幼児から、㊧は中・高校生も楽しめる本です。

定期購読者限定プレゼント

新刊絵本プレゼントの詳細は、このページの下欄をご覧ください。

『イソップねずみのイソップものがたり うさぎとかめ』

文・絵／しもかわらゆみ
1,650円(あかね書房)

おはなしの上手なネズミのイソップが、子ネズミたちにつけてこのおはなしをせがまれました。そこで、どちらが速いか競争をすることになった「うさぎとかめ」の話を語り始めました。聞き終えた子ネズミたちは口々に感想を言います。



『だるまん あつぷつぶ!』

文／長野ヒナ子
絵／つちだのぶこ
990円(あすなろ書房)

にらめっこは、誰とでもできる、笑うと負けの遊びです。まずは、だるまさんとにらめっこしましょう、あつぷつぶー! だるまさんは笑いません。ゆうちゃんも、おじいちゃんも、にゃんこも笑いません。では、赤ちゃんは?



『とんでごらん!』

文／ダヴィデ・カリ
絵／アダルジーザ・マゼッラ
訳／橋本あゆみ
2,310円(アチエロ)

モモンガのマイコルは、木から木へ飛び移るなんて、どうしてもイヤでした。もし手がすべったら? おっこちちゃったら? トラの口の中に入っちゃったら? いろんな不安が頭をよぎります。



※JPIC直販の定期購読の方に、抽選で新刊絵本100冊から1冊をプレゼントします。巻末のアンケートハガキまたはホームページのアンケートフォームから応募してください。

著作権保護コンテンツ

プログラム (各 10～15分) 小学校高学年

7月 テーマ: ある夏の日の出来事

①『なつのいちにち』

作／はたこうしろう
1,100円(偕成社)
「夏の音、匂い、空気」を感じ、子ども時代を思い出しながら読めたら最高です！



②『すいかのたね』

作・絵／さとうわきこ
1,100円(福音館書店)
スイカの種のほやしき声と、最後に食べられるときの怒鳴り声は、日ごろの憂さを晴らすつもりで思っきり大声でどうぞ！



③『ナガノさん まっちゃアイスの巻』

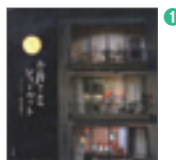
作／中川ひろたか 絵／長谷川義史
1,650円(アリス館)
長野ヒデ子さんの実話。「読んだら私みたいなアホになるわ！ 読んだらいかん！」とご本人談!! ますます読みたいくなりますよね～。



8月 テーマ: あついあつい夏の夜

①『お月さんのシャーベット』

作／ベク・セナ 訳／長谷川義史
1,540円(プロンス新社)
関西弁の響きはあたたかいですが、読めば気分だけは涼しくなるかもしれません。



②『わがはいはのっぺらぼう』

作／富安陽子 絵／飯野和好
品切れ中(童心社)
夏といったら“おばけ”、“おばけ”といったら「ゾッ」として、「ヒヤッ」としませんか？



③『ようかいサッカー』

文／聞かせ屋。けいたろう 絵／ひろかわさこ
1,815円(ポプラ社)
“ろくろくびのヘディング”はスムーズに首をのばすための練習が必要です。



9月 テーマ: 食育の秋??

①『ふしぎなでまゐ』

作／かがくいひろし 1,650円(講談社)
食べるだけなら「あつ」という間！ でも出前(料理をつくるの)は大変なんです！ 料理をする音はリズムカルに読みましょう♪



②『まかしとき!』

作／くすのきしげのり 絵／のしやか
品切れ中(フレーベル館)
料理の味づけは愛情がいっぱい！ 最後にゆつくりはつきり裏表紙を見せることをお忘れなく！



(横山裕美)

プログラム (各 10～15分) 小学校中学年

7月 テーマ: プール開きだよ!

①『プールにいこう!』

作／みうらとも 1,650円(国土社)
はりきってプールに行くたびに、予想外のことがなっていて泳げません。でもがっかりせずにまたあした！と前向きな気持ちで。



②『はかせの ふしぎなプール』

作／中村至男 1,320円(福音館書店)
こちらのプールも泳げません。プールに何が入っているか、みんなで当ててみてね。



③『すいかのプール』

作／アンニョン・タル 訳／斎藤真理子
1,870円(岩波書店)
スイカのプールに入ったら、どんな気持ちでしょう。細かい字は全部読まなくてもOKです。



8月 テーマ: もっとこわいもの

①『それより こわい』

文／村中李衣 絵／近藤薫美子
1,540円(佼成出版)
お互いにもっと怖いものを言い合っていく会話の行く先は？ ふたりで読み合いをすると臨場感がある、さらに涼しくなるかもしれません。



②『ごろべえ もののけのくにへいく』

作／おおともやすお 1,430円(童心社)
ごろべえの飄々とした人柄にじみ出てきます。結末は読み手もひやっとしますね。



9月 テーマ: 元気なおじいちゃん・おばあちゃん

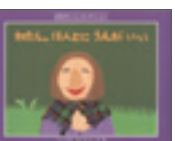
①『あらまっ!』

文／ケイト・ラム 絵／エイドリアン・ジョンソン
訳／石津ちひろ 1,650円(小学館)
おばあちゃんの「あらまっ!」の繰り返しのたびに、驚き具合がどんどん大きくなります。テンポよく楽しく読みましょう。



②『わたしゃ ほんとに うんが いい イギリス民話』

文・絵／せなけいこ 1,210円(鈴木出版)
どんなに夢がしぼんでも、切り替え上手な前向きおばあちゃん。心が軽くなりますよ。



③『おじいちゃんのくしゃみ』

作／阿部 結 1,540円(福音館書店)
こちらのおじいちゃんもバワフルな点では負けていません。くしゃみは大声でなくてもいいけど最大の迫力を出しましょう。



(粟生真弓)

プログラム (各 10～15分) 小学校低学年

7月 テーマ: 野菜と仲よしになろう

①『やさいのはな なんのはな?』

構成・文／宮崎祥子 写真／網野文絵
1,540円(岩崎書店)
子どもたちはクイズが大好きです。「何の花? 野菜の花だよ。今日の給食に入っているかも……」と問いかけて、本の世界へ誘いましょう。



②『まめとすみとわら』

文・絵／せなけいこ 1,210円(あかつき教育図書)
炭やわら、そら豆を写真などで補足すると、「へえー」と声があがりそうですね。



③『ごぼうせんせいの いそがしいいちにち』

作／植垣歩子 1,430円(佼成出版)
待合室での野菜たちは、人間と同じようて親近感が湧きます。細かく描かれた絵も楽しんで。



8月 テーマ: 夏のお出かけ先は……

①『夏』

作／あべ弘士 1,760円(ほるぷ出版)
地図の中を見て！ あなたもいるよ。大迫力の絵はその場に一緒にいる気持ちになります。



②『ペンギンたんけんたい あやしいゆうれいせん』

作／斉藤 洋 絵／高島 純 1,650円(講談社)
行く手に何があらわれようと全速力で前進の探検隊。どう？ 11番目の隊員に立候補してみない？



③『すいかのプール』

作／アンニョン・タル 訳／斎藤真理子
1,870円(岩波書店)
こんなプールがあったら夏休み毎日通っちゃうよね。みんなはどんなプールで泳ぎたいでしょうか。



9月 テーマ: 9月といえば

①『ぼくはひとりで』

作・絵／フン・グエン・クアン、フィン・キム・リエン
原書編集／ダフネ・リー
訳／はっとりまこ 2,200円(富山房インターナショナル)
ベトナムでは9月に新学期がスタート。雨季なので、地域によってはボートで通学する子もいるようです。諸々の違いを話して読んでみては。



②『ぼくのジイちゃん』

作／くすのきしげのり 絵／吉田尚令
1,430円(佼成出版)
運動会で大活躍！ スーパーじいちゃんの走り方を練習して、狙ってみようよ、1等賞。



③『おだんごダイブ』

文／大塚健太 絵／小池壮太 1,430円(白泉社)
みんなのいちばん好きなおだんごは何？ 裏見返しにあるおだんごのつくり方もぜひ紹介を。(岩井淳子)



対象別おはなし会のプログラムです。
ここで紹介する絵本や紙芝居は、
ご家庭での読みきかせにもおすすめです。
ブックガイドとしてもご活用ください。

行事絵本・季節の絵本

梅干しの日

『うめぼしさん』

文／かんざわとしこ 絵／ましませつこ
1,320円(こぐま社)
おにぎりやお弁当に欠かせない梅干しは、古くから伝わる保存食。梅の花が咲いてから、梅干しになるまでを楽しく紹介します。



防災の日

『つなみてんでんこ はしれ、上へ!』

文／指田 和 絵／伊藤秀男
2,035円(ポプラ社)
昔からの言い伝えを守り、訓練を繰り返して備えてきた地域の人々は、あの日も大津波から、みんなで生きのびることができました。



紙芝居

『むし、はっけん!』

脚本・絵／じゅえき太郎
1,540円(童心社)
夏の楽しみのひとつに、昆虫採集があります。虫たちは、どこにいるでしょう？ 花や葉っぱ、木のかげにも、上手に隠れています。



紙芝居

『二度と』

脚本・絵／松井エイコ
2,200円(童心社)
今年は戦後80年。原爆投下というつらく、厳しい事実を知ること、考えることはますます大切になっています。



紙芝居

『コンコンぎつねのおつきみ』

脚本／よこみちけいこ 絵／石川えりこ
1,540円(童心社)
お月見が何か、キツネの兄弟にはわかりません。でも、お月さまが見えずがっかりしているケンタたちを見て、2匹は木にのぼっていききました。



(安富ゆかり)

保育者のたまごたちと絵本

保育現場の先生たちは、養成校で絵本についてどのように学んできたのでしょうか。
國學院大學の事例を吉永安里さんに伺いました。

取材文／荒木晶子



授業でつくった絵本は、みんなで披露して感想を聞き合います。



絵本キャラバンのおはなし会は、子どもたちの反応を直に体感できる貴重な機会です。

見識や専門性を高めるカリキュラムを重視

國學院大學人間開発学部子ども支援学科では4年間の課程で、幼稚園教諭や保育士を養成しています。それらの免許・資格取得を前提に、成績上位の学生数は小学校教諭の免許も取得して卒業していきます。卒業後の進路は6割が保育職、3割が一般企業、1割が小学校教員等で、保育職は公立の幼稚園や保育園が多いのが特徴です。

本学科で大事にしているのは、地域に貢献し、これからの日本の保育界を実践家としてリードしていける人材を育てることです。3～4年生では、絵本や音楽・造形などの言語・芸術、心理学や栄養関係、家庭や地域の子育て支

援・社会福祉など、多様な科目からなる選択科目を増やし、学生の興味関心を生かしてより高い専門性を身につけられるようにしています。幼稚園や保育園、施設などでの実習もあつて大変忙しい学生生活ですが、とてもまじめで熱心な学生が多いです。

3年生後期以降の選択科目で実際に絵本を制作

私は1年生からの「幼児と言葉」、2年生からの「保育内容(言葉)」、3年生からの「絵本とことば」を担当しています。

「幼児と言葉」では子どもの発達についての理論を教え、「保育内容(言葉)」では言葉を保育者がどのように育んでいくかについて演習を行っています。理論の

「幼児と言葉」にも、絵本や紙芝居、ペープサート、パネルシアターなど教材の説明や扱い方などを盛り込んだり、パネルシアターを見せたりなど、実技的な部分を取り入れています。

「絵本とことば」では、さらに絵本について学びを深めます。構成要素や視点、展開の工夫、表現技法などについて学んだあと、好きな絵本のどういうところがおもしろさにつながっているかを分析して、実際に絵本をつくります。最終的なゴールは、絵本がどういう要素でできあがっているかを理解し、自分で表現できること。

授業には「びよちゃん」シリーズ(Gakken)で知られる絵本作家のいりやまさとしさんや、編集者の方に来ていただき、絵本作家が



吉永安里 よしながあさと

國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授。東京都の私立幼稚園、公立小学校、東京学芸大学小金井小学校勤務を経て現職。専門は言語発達、国語教育、幼小接続。著書に『幼児教育と小学校教育における言葉の指導の接続 読むことの指導の差異と連続性から』(風間書房)などがある。

著作権保護コンテンツ

絵本を通じた人とのつながりを大切に、
自分の関心を広げていってほしい

何を大切にして制作しているのか、絵本がどのようにつくられていくのかなどのお話も伺っています。

絵本づくりの前には、自分で絵本専門店を調べて訪れ、レポートを提出してもらっています。時間があれば店員の方に話を聞いたり、写真を撮らせていただいたりするとともに、絵本を手にとってもらう工夫や絵本に親しむためのイベントなどに注目するようアドバイスしています。

絵本の読みかせて地域とつながる「絵本キャラバン」

本学には子どもと関わるサークルもたくさんあり、そのひとつが、私を含め4人の教員が顧問を務める「絵本キャラバン」です。もともとは地域とのつながりを大切にする目的で、本学部の活性化の授業として「宇宙の学校」「ミュージックキャラバン」「絵本キャラバン」という3つを行っていました。

サークルとなった現在も、近隣の幼稚園や保育園、小学校、子育て支援施設などと連携しておはなし会をしたり、地域の子ど

もたちを呼んで子ども向けの出し物やおはなし会を行っています。また、年2回ほどの神社のお祭りでおはなし会をする活動なども行っています。

絵本は人と人とをあたたくつないでいくもの

私はとても絵本が好きで、小さいころは『幸せな王子』を二日に何度も母に読んでもらっていたようです。学生のころからは『どんなにきみがすきだかあててごらん』(評論社)が一番のお気に入りになりました。諸外国でも出版されているので、海外に行くとき必ず購入してコレクションしています。

絵本の魅力は、子どもでも大人でもどんな人でも楽しめること。そして、読むだけでなく、絵を見ても楽しめること。でも、一番の魅力は、誰かと一緒に楽しめることではないでしょうか。絵本は「人と人をつなぐツール」だと思います。

それを強く感じた、小学校の初任時代のとても印象深いエピソードがあります。児童のお母さんたちが思い出の絵本や子ど

もたちの読みたい絵本を読みまかせしてくれた際、あるお母さんが『しろいうさぎとくろいうさぎ』(福音館書店)を読み、ご自身がプロポーズされたときに読んでもらった絵本だとお話しされたのです。ご夫婦のつながりと子どもが愛し愛されて生まれた存在だということが1冊の絵本を通して感じられ、胸がいっぱいになりました。

自分の好きな絵本を紹介する1年生の授業でも、好きな理由を学生たちに尋ねると、「おじいちゃんが最初にプレゼントしてくれたから」「園の先生が読んでくれた大好きなおはなしだから」などの答えが返ってきます。そのことから、子どもにとっては何を読んでもらったかより、誰とつながりのある絵本なのかがとても大事なのだと感じています。

学生には、誰か大切な人に絵本を読んでもらううれしかった、大切な誰かに絵本を読んであげて幸せだった、そんなことが多い人生であってほしいですね。そして、本を通して自らの関心を広げ、成長し続けていってほしいと願っています。

すべての子どもたちに笑顔を 支援の必要な子 と絵本

前号では、新宿区立大久保図書館館長の米田雅朗さんに多言語の読書支援や多文化共生への思いなどをお聞きました。今号では、外国語による絵本の読みきかせをする「おはなし会」など、多文化交流イベントの様子や今後の展望などをお話いただきます。

取材・文／荒木晶子



米田雅朗 よねだ・まさお

新宿区立大久保図書館館長。出版社勤務などを経て図書館員となり、2011年より現職。

さまざまな言語によるおはなし会を開催

本館では、外国語を母語とするお子さん向けのおはなし会など、イベントの開催にも力を入れていきます。おはなし会は、以前は月2回行っていたもののコロナ禍で中断。2年前から少しずつ再開し、現在は毎月1回、第3もしくは第4土曜日に行っています。

これまで英語、韓国語、中国語、ネパール語、タガログ語、ウクライナ語、アラビア語、ミャンマー語、ペルシャ語など、毎回言語を変えて開催してきました。チラシをつくって館内に掲示・配布するほか、保育園や幼稚園に配布したり、歌舞伎町の「しんじゅく多文化共生プラザ」に置かせてもらったりして、周知を図っています。

多言語のおはなし会を積極的に行うようになったのは、あるNPO団体の協力がきっかけです。外国語の書籍を仕入れるのと同様、多文化サービス（※）といつても最初は何をすればいいのかかわからず、とにかくいろいろな方にお会いして情報を求めています。そうしたなかでNPO団体とイベントの開催について相談したところ、本館ではタイ語とタガログ語のおはなし会が可能だったことからスタート。2024年で14年目を迎えました。

最初のおはなし会でタガログ語が母語の少年に絵本を読んでももらったのですが、来館したときは自信がなさそうだった彼が、母語を読んだことで読み終わったときには堂々としていたのを見て、「この企画をもっともつとやろう」と思ったのを覚えています。

いろいろな人とながり、開催できるおはなし会が増えた

おはなし会がここまで続いているのは、人との出会いも大きかったです。たとえば、アラビア語のおはなし会をしている富澤規子さんはアラビア語の翻訳者で、現

在はエジプトの私立大学で語学教師をしている方です。帰国したときに必ず東京都板橋区の「いたばしボローニャ絵本館」を利用して、あるときアラビア語の絵本が本館に貸し出されていたことで本館の多文化サービスの取り組みを知り、おはなし会を提案してくれました。その1回目にはたくさんの方が集まったことから、毎年1回行うようになって、昨年で10回となりました。

さらに、ペルシャ語の翻訳者・愛甲恵子さんともたまたま知り合いました。そして、トルコ語もあつたら中東の3言語がそろったという富澤さんのひと言から、ある団体の方にトルコ語の読みきかせができる齋藤いづみさんを紹介してもらって、中東の3言語のおはなし会を実現させました。

また、チェコ語のおはなし会をしているヤロシユ茜さんは、チェコ共和国大使館に勤務していて、以前大久保に住んでいた方です。本館のさまざまな外国語でのおはなし会を知り、やはり自ら提案してくれました。ヤロシユさんがポーランド語とスロバキア語を話せる方を紹介してくれ、次はポーランド語のおはなし会も開催

著作権保護コンテンツ

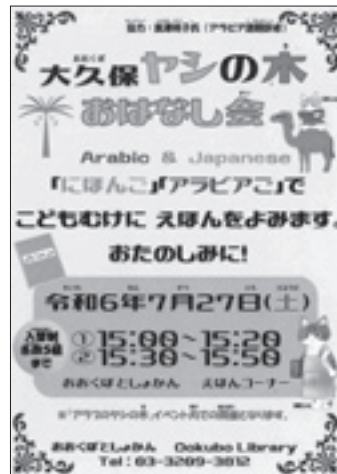
できることになりました。

おはなし会の参加者はその言語を母語とするお子さんとお母さんをはじめ、ご家族総出でさまざまな年齢の方が参加することもありますし、日本人の常連の方もいらついています。

ときにはその国の様子がわかる写真や服などの展示をすることもあり、言葉だけでなく、文化も含めて相互理解ができる機会になっていると思います。

外国の方と日本の方がともに集える場でありたい

お子さん向けだけでなく、大人向けの企画も開催しています。



アラビア語おはなし会のチラシ。各イベントごとにチラシを配布し、参加を呼びかけています。



アラビア語によるおはなし会の様子。子どもたちが集中して絵本に見入っています。



韓国出身スタッフによる、韓国語の読みきかせ。折り紙でチマチョゴリを作りました。

ひとつは、外国の方にわかりやすい「やさしい日本語」のワークシoppです。きっかけは、「大人向けのイベントはないですか」と聞かれたことでした。ちょうどそのころ、新宿区に住む外国人の方へのアンケートの結果が出て、「日本での生活でいちばん困っていること」として、「日本語がわからない」ということ、そして「日本人と交流する機会を持ちたい」という回答が多くありました。そこで、日本語を知ったり、習得したりできるような企画ができないかと思つていたところ、「多言語多読」というNPO団体の方とお話ししたことを思い出しました。多言語多読とは、その言語

の本をたくさん読むことによって習得する方法で、「やさしい日本語」ではその教材や絵本を中心に読んでいます。2015年に第1回を行って評判がよかったので、翌年から年2回開催。こちらもコロナ禍で中断しましたが、23年12月から再開しました。

常に新しいものを求めながら発展させていきたい

今後は、おはなし会の言語のレパートリーをさらに増やしていきたいと思つています。中東3言語コラブ企画ができたので、バルト三国や北欧など、他の言語でもコラブ企画ができたらいですね。イベントのやさしい日本語、ビブリオバトル、モノトークも、さらに発展させていきたいです。

13年間館長をしていることで、地域の特徴や取り組みのための流れがつかめていることは強みですが、マンネリになる危惧も感じています。そうならないよう、常に新しいものを求めているかなくてはならないと思つています。

※多文化サービスについては前号の本記事にて詳しく紹介しています。